

二〇二二年度 一般選抜 学力検査(国語)

国語総合 (近代以降の文章) ・ 現代文B

解答番号

1

〜

28

一 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えなさい。

ふだん、私たちはよく、会話の中で、「われわれは社会の中で生きているのだ」とか、「社会の壁は厚いよ」とか、「社会も変わったものだ」とか、「君も、これからは、社会の荒波を乗り切っていかなければならないよ」といったことを口にする。そして、そのとき、このようなことを口にする人も、それを聞いている人も、あたかも「社会」という実体がわれわれ人間とは別に存在するかのようになっているし、実体としての社会があることをとりわけ不思議とも考えてはいない。また、私たちは、「子どもが変わったのは社会が変わったからだ」とか、「このような社会では人類は生きていけない」と言い、だから、「早急に社会を変えなければならない」などとも言っている。そのときも、そう言い、それを聞くわれわれが頭の中で思い浮かべているのは、社会の仕事みだとか、組織や制度や法律だとか、教育の内容だとかであって、個々の人間を思い浮かべてはいない。

しかし、少し^アレイセイになって考えてみれば、社会という実体が、人間と離れて存在してはいないことにすぐ気がつくはずである。ここにこういう社会があるとか、あそこにああいう社会があるといつて指し示してみせられる社会などはないのである。社会が実体として存在するとしたら、それは生きて生活している人間そのものであって、人間以外に社会の実体をなすものはない。社会の実体であるかのように思い込んでいる組織とか制度とか法律なども、人間が社会生活を営む過程で、社会生活を円滑にするための便宜として、暫定的に作った作り物や作り事であって、われわれ生きている人間と離れて、客観的に存在しているものではない。だから、制度や法律などは、われわれが生活していく上で不要と考えたら、いつでもなくせるものであり、不都合なら、いつでも都合のいいものに変えることができるものなのである。

I

繰り返すが、社会²の実体は生きた人間である。何人かの生きた人間が集まっている状態が社会なるものの実体である。とはいっても、幾人かの人間が、互いに何の関係もなく、ただ漫然と集まっている状態では社会とはいえない。複数の人間が、血縁とか地縁とか契約といった、何らかの関係やつながりをもって集まっている状態が社会というものである。何らかの関係やつな

がりをもって集まって生活し始めた人々は、そういう状態を互いに快いものにし、長く持続させようとするのが常である。 **A**、いくつかの約束ごとが作られることになる。そうして作られた約束ごとを、一般には、総称して「文化」というが、その文化の中身が、言葉や仕組み（制度）やきまり（規範）やおきて（法）などである。こうした文化の数を増やし、改良を加えつつ複雑なものにし、それらを世代から世代に引き継ぎつつ、社会の規模を大きくし強固なものにしてきたというのが、人間社会のおおまかな歴史であると理解しておいていいだろう。

では、「社会力」とは何か。端的にいえば、社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な⁽⁴⁾シツツや能力ということである。このような意味を込めた社会力は、わが国では「社会化」と訳されている⁽⁵⁾ジンメル⁽⁶⁾の“Vergesellschaftung”という用語にヒントをえて私が造った新しい概念である。 **II**

社会学では、一般に、「社会化 (socialization)」という概念を、ある社会に生まれたヒトの子がその社会の一人前の成員になっていく過程という意味で用いている。したがって、ジンメルが用いている社会化の概念はジンメル独自の概念である。⁽³⁾

ジンメルという社会化とは、「人々が日常的に繰り返し返している相互行為が、社会なるものを成り立たせている実体であり、それが社会を社会たらしめているという意味で、社会化と言いつづけることができる」というものである。社会を成り立たしている日常生活のある状態を社会化と名づけたといえよう。 **B**、私がいう社会力は、社会生活を営む人々のある状態をいうのではなく、社会というものを作り上げていく人間の側の能力とか意欲などのことである。 **III**

話をわかりやすくするために、ジンメルの使ったVergesellschaftungという用語を解体すると、Ver-という接頭語と、gesellschaftという本体部分と、-ungなる接尾語の三つの部分に分かれる。接頭語のVer-は、「それっ」とか「さあっ」とかいつた、物事を始めるときの掛け声のようなものであり、本体のgesellschaftは、ずばり社会そのもの⁽⁷⁾のことであり、接尾語の-ungは、英語の進行形を示す-ingと同じで、ある行為が持続していることを示す名詞形である。 **C**、Vergesellschaftungはまさに社会を作っていく作業そのもの、すなわち社会を作っていく駆動力⁽⁸⁾を連想させる。少なくとも私にはそう思えてくる。そ

んなわけで、ここでの社会力は、社会のある種の状態のことをいうのではなく、もっと主体的に、好ましい社会を構想し、作り、運営し、改革していく意図と能力と、そのための日常的な活動をフクめた意味(7)で用いることにしたい。

IV

このように説明すると、多くの人が心理学の常用語となっている「社会性」の概念とどこが違うのかと反問したくなるはずである。そこで、社会性について調べてみると、よく使われているわりには、その定義や内容が心理学者の間で共有されているわけではないことがわかる。広い意味では、「社会が支持する生活習慣、価値規範、行動規範などによって行動できるという社会的適応性」を指しており、狭い意味では、「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」を意味しているという(4)（繁多進他編『社会性の発達心理学』）。しかし、だからといって、心理学者の間で社会性についてのイメージがバラバラであるというわけではない。心理学者がイメージする社会性とは、煎じ詰めれば、現在自分が住んでいる社会に適応しているかどうかのポイントになっており、適応性があることが社会性があることの証し(5)だとする点では認識が一致しているといっている。こういうイメージで定義づければ、社会性とは、「すでにある社会にうまく適応できていること」とか、「社会に適応してやっていけるさまざまな知恵や技術を身につけていること」ということにもなる。その社会に支配的な価値観や行動の仕方や習わしや言葉づかいなどを身につけ、やるべきことをそつなくやり、他のメンバーとの人間関係もうまくやっている人がいれば、その人は社会性に富んでいるということになる。

こう説明してくれば、私がいう社会力とこれまで主として心理学者によって使われてきた社会性がどこでどう違うかがはっきりしてくるはずである。社会性の概念が現にある社会の側に重点を置いているのに対し、社会力という新しい概念は社会をつくる人間の側に力点をおいた概念であるともいえる。社会性が既存の社会への適応を旨とし、その社会の維持を志向する概念であるとしたら、社会力は既存の社会の革新を志向する概念であるといってもいい。

V

いま、子どもや若者の社会性不足が指摘されているが、私の見方をいえば、若い世代に欠けているのは社会性ではなく、社会力であるということになる。

D

、社会力が欠けているのは何も若い世代だけではなく、先行世代である大人たち自身が相当

に社会力を欠いているのが現状であるということになる。

(門脇厚司『子どもの社会力』による。出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。)

(注) ジンメル——ドイツ出身の哲学者、社会学者(1858～1918)。

問1

傍線部(ア)～(ウ)と同じ漢字をふくむ熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、1 ～ 3。

(配点6点)

(ア) レイセイ 1

- ① レイギをわきまえる。
- ② レイコンの存在を信じる。
- ③ 食料品をレイゾウする。
- ④ ゴウレイとともに出発する。
- ⑤ 奮闘する選手をゲキレイする。

(イ) シシツ 2

- ① シキシにサインをする。
- ② 組織のシキンを運用する。
- ③ 植物性のユシを採取する。
- ④ 地元のメイシの演説を聞く。
- ⑤ 高名な芸術家にシジしている。

(ウ) フクめた 3

- ① 全員イチガンとなつて戦う。
- ② 川のタイガンに渡る。
- ③ 彼はガンコな人だ。
- ④ 思わぬガンプクにあずかった。
- ⑤ ガンチクのある言葉を聞く。

問2

次の文は本文の一部であるが、文中の **I** ～ **V** のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選びなさい。
解答番号は、**4**。
(配点3点)

社会について考える場合、まず、このことをしっかり頭の中に入れてほしいと思う。

- ① I
- ② II
- ③ III
- ④ IV
- ⑤ V

問3

空欄 **A** ～ **D** を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、**A 5**、**B 6**、**C 7**、**D 8**。
(配点8点)

- ① こうしてみると
- ② もはや
- ③ とはいえ
- ④ さらにいえば
- ⑤ それに対し
- ⑥ そこで
- ⑦ というのも
- ⑧ たとえば

問4

傍線部(1)『われわれは社会の中で生きているのだ』とか、『社会の壁は厚いよ』とか、『社会も変わったものだ』とか、『君も、これからは、社会の荒波を乗り切っていかなければならないよ』といったこと』とあるが、会話に出てくるこれらの表現を挙げることによってどのようなことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

9。

(配点5点)

- ① 人々は、法律や制度や組織を社会の実体とみなしつつ、日常では自らと無関係なものと捉えがちであるということ。
- ② 多くの人々にとって、社会は制度や法律などの仕組みによって人間を束縛するものとして存在するということ。
- ③ 社会は制度や組織や法律などの体系から成り立つ実体であるが、その理解は個々人によって異なるということ。
- ④ 多くの人々は、社会は体系的な制度や組織、法などで構成され、実体として存在すると考えがちであるということ。
- ⑤ 人々は普段から、社会を客観的に存在する実体として把握し、言語によって感覚的に表現しているということ。

問5

傍線部(2)「社会の実体は生きた人間である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

10。

(配点5点)

- ① 社会の実体と人間は不可分であり、一人一人が相互につながる快い関係によって社会は維持されるということ。
- ② 社会の実体をなすのは人間であり、社会とは互いに関係する人間が集団として生活する状態であるということ。
- ③ 社会の実体は人間によって構成されており、社会は集団生活を守るための約束事で成り立っているということ。
- ④ 社会の実体と人間は互いに結びついており、複数の人間が集まって生活している状態が社会であるということ。
- ⑤ 社会の実体は人間そのものであり、社会は互いに協力する複数の人間が一致団結して成立しているということ。

問6

傍線部③「ジンメルが用いている社会化の概念はジンメル独自の概念である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

11。

(配点5点)

- ① ジンメルの社会化とは、生後人が社会の成員となつていく過程という意味ではなく、社会を構成する人々が日常的に相互行為を繰り返している状態という意味であるということ。
- ② ジンメルの社会化とは、一人が社会の成員となるまでの過程という意味ではなく、複数の人々が生きる集団によって社会が構成される状態という意味であるということ。
- ③ ジンメルの社会化とは、人々が日々社会生活を営んでいる状態という意味ではなく、社会生活を営む人々が意識的に社会を作り上げていく作業という意味であるということ。
- ④ ジンメルの社会化とは、個人が成長することで社会に適応している状態という意味ではなく、成長した後に社会を構成する一員がその役割を果たしている行為という意味であるということ。
- ⑤ ジンメルの社会化とは、人間がある社会に適応していく過程という意味ではなく、社会を構成する人々が日々相互行為を繰り返すことで社会を実体化していく過程という意味であるということ。

問7

傍線部(4)「心理学の常用語となっている『社会性』の概念」とあるが、それはどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。

(配点6点)

- ① 人が多様な価値規範や行動原理を学び、自らが育った社会とは異なる社会の生活に適応しようとする意欲。
- ② 人が社会を支配する価値規範やルールを順守し、自他の区別なく社会の一員であることを優先する考え方。
- ③ 人が社会に共有される価値観や行動原理を習得したうえで、さらによりよい社会を作ろうとする主体性。
- ④ 人がある社会に適応する際に身に付けることが必須の、その社会に固有の価値意識や生活上の様々な習慣。
- ⑤ 人がある社会における固有の価値観や行動原理に従い、他者との共同生活を営むことに適応できる性質。

問8

傍線部⑤「私がいう社会力」とあるが、それはどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

13。

(配点6点)

- ① 人間が社会を構成する中心的存在であることを踏まえたうえで、生活する人々の集まりである社会としての安定的なあり方を守り維持していこうとする意欲や行動力。
- ② 社会の実体をなすのは生きた人間の日常生活であるとし、制度や法律などの社会システムを人それぞれの利便性に合わせて常に改良しようとする活動や能力。
- ③ 人間が社会を作る主体であるという自覚をもって社会を運営し、あるがままの社会に安住せず、常に社会を改良する構想をもって改革をめざす能力や行動力。
- ④ 社会の主体的存在は人間であると考え、既成の制度や法律に安易に従うことなく、個々の自立した生き方を何より優先する社会を実現しようとする意欲や能力。
- ⑤ 人間が主体的に社会を作るべきだという意識をもち、社会的制度や規範などに改良を加えて複雑化し、より強固で大規模な社会運営を行おうとする能力や行動力。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 社会における組織や制度などは実体ではなく、生活する人間にとっては不要なものである。
- ② ジンメルの概念を引き継いだ筆者のいう社会力は、社会性とともに現代の人々にとって必須である。
- ③ 社会力という概念は、社会そのものではなく、社会に生きる人間のあり方を中心に据えている。
- ④ 人間にとって社会力の養成は重要な課題だが、人間の側に重点を置く社会性もまた重要である。
- ⑤ 現代の若い世代の社会力不足は、先行する大人たちに社会力が欠けていることに原因がある。

二 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えなさい。

「職人」と「芸術家」の違いとは一体何なのだろうか？ 簡単にいえばそれは「署名」の有無である。

料理人をたどえにするのがわかりやすからう。町の定食屋の主人は毎日同じ定番メニューを出す。おいしいハンバーグやラーメンを丁寧を作る。しかし彼は出しゃばらない。自分の個性を意識的に出そうなどとはしないし、客に講釈をたれたり説教をしたりもしない。型通りのメニューを作り、客が喜んでくれれば、それで満足だ。「料理人、厨房^{ちゅうぼう}を出ず」が彼らのモットーであり、自分が匿名であつても全然かまわないのである。

(1) この対極にあるのがマスコミの寵児^{ちやうじ}となるようなスター・シェフ^{たぐい}の類である。彼はオープンキッチンで客に顔を見せて料理するかもしれない。顔写真入りの雑誌インタビュー記事で **X** 自分の料理哲学を語ったり、食品会社とタイアップして「オレの○△○」を売り出すこともある。マナーの悪い客には説教するかもしれない。これらすべてが、俗に「芸術家気取り」と呼ばれるものにきわめて近い。「オレにしか出来ない」とか「オレは特別だ」というこの自我こそ、いわゆる芸術家意識にほかならない。

中世のゴシック教会のステンドグラスに作者の署名はない。それを作ったのは無名の職人たちである。画家や音楽家が自ら名を名乗るようになるのは中世末期からである。とりわけルネサンス美術では、ダ・ヴィンチやミケランジェロなど、強烈的な芸術家の自意識をもつ人たちが生まれ始めた。それに比べて音楽家の場合、⁽²⁾「自立した芸術家」が生まれるのはかなり遅れた。十八世紀の前半に生きたバッハにも近代的な芸術家意識はほとんどなく、彼は自分のことを「教会に仕える神のしもべ」以上とも以下とも思っていなかったであろう（バッハはライブチツヒの教会に勤めていた）。モーツァルトの先輩ハイドンも、終生つましい職人意識を持ち続けていた。

作曲家が決定的に「芸術家」となるのは十九世紀、ベートーヴェン以後のことである。ベートーヴェンについては、どれだけ

貴族の婦人にコンガン(ア)されても気が向かないといってピアノを弾かなかったとか、貴族とすれ違ってもお辞儀をしなかったといったエピソードが多く残されている。彼は特定の貴族や教会に一度も奉公しなかつたし、もちろん何人もの有力貴族のパトロンはいたにせよ、そのありようは従来の正反対で、ベートーヴェンは貴族たちを自分のパトロンとして奉仕させたのだともいえる。「晩餐会(ばんさん)のための音楽を書いてくれ」だとか「次は舞踏会のための曲がほしい」といった頼まれ仕事はあまりせず、勤め人もならず、「オレの音楽」だけでフリーとして食っていった最初の一人。それがベートーヴェンである。

モーツアルトは一七五六年、ベートーヴェンは一七七〇年の生まれだから、モーツアルトはベートーヴェンよりおよそ一回り人生の先輩だったということになる。この年の差は非常に重要で、モーツアルトはまさに音楽家が職人から芸術家になる、ちょうどその過渡期の人だった。「フリーの芸術家」という可能性にいち早く気づき、しかしすこし世に生まれるのが早すぎた人、それがモーツアルトだ。彼が夢見たこと、つまり「オレの音楽」だけで食っていくという理想は、その後継者世代のベートーヴェンにおいてようやく実現可能なものとなった。モーツアルトは近代世界がまさに誕生しようとする、その瞬間を生きた人であった。

「芸術家」などという概念がまだ確立されておらず、世の多くの人が画家や音楽家など職人以上のものではないと思っていた時代^③にあつて、いち早く近代的な「天才芸術家」の概念を予告した著作に、哲学者カントの『判断力批判』がある。これは一七九〇年、つまりモーツアルトが亡くなる前年の出版である。

カントの思想において「芸術」と「天才」はきわめて密接に結びついているのだが、そして彼によれば天才と芸術家とはほとんど同義なのだが、カントが考える「天才」概念のなかには、私たちが抱く天才イメージのほぼすべてが出そろっている。つまりカント的天才とは「無から規則を作る」人、すなわち既成のルールにとらわれない「自由」で「独創的」な人のことなのだ。

A 天才はこれを無意識にやつてのける。誰かに教わったりしない。天才とは凡人が思いもよらないものを本能だけで発見してしまうテンイムホウ(1)の人であつて、ここにはやがて来ることになる民主主義の世界、つまり個人の無限の可能性というものに何より信頼を置く時代の**Y**としての天才芸術家像が予告されている。「あなたの可能性は無限だ」とか「人間って素晴らしい」と

か「人間は自由だ」とか「あなたらしくあれ」というとき、人はカント的天才概念の遺産を食はんでいるのかもしれないのである。

モーツァルトがカント的な意味で天才であったかは議論の余地があり、まさにそこが面白いところなのだが——そしてここにはモーツァルトがちょうど職人から芸術家への途上に生まれた人だったということが深く関係しているのだが——、それについては追って触れよう。ここではまずカントの天才概念について、もうすこしだけ説明をしておきたい。というのもカントの天才の定義は、そのほぼすべてが私たちの天才イメージと合致しているにもかかわらず、ただ一点のみ、ひどく今日的「天才」概念から外れている点があるからである。つまりカントは、「IQ 200の天才」といった表現が指すような「頭の良さ」について、まったく無視しているのである。

「規則に従って習得されたもの」をカントは、断固として「天才」の範疇はんちゆう外がわいに置く。お勉強して身につけたものなど天才でも何でもないと考えるわけだ。

B

IQテストには当然既成の諸々のルールもろもろがあり、それにのっとって高得点をマークしても、

そんなものは天才の証あかしでも何でもないということである。「秀才」は独創的ではないから「天才」ではない、という話だと思ってもいいだろう。

そして面白いことにカントは、⁽⁴⁾まったく同じ理由によって、科学に天才はいないと断言する。「天才科学者」などはいない——ニュートンの名を引き合いに出しながら、カントはこう力説する。彼によればニュートンは、たしかに非常にすぐれた科学者ではあっただろうが、彼が発見した規則は、いったんそれが知られるやいなや、誰でもそれなりに模倣学習することが可能になる種類のものだ、だからニュートンは天才ではないというのである。カントいわく、科学において偉大な発見者と凡人の差は相対的なものにすぎない。

カントの考えでは、本物の天才は芸術の世界にのみ存在する。天才の条件とは、既成の規則からまったく自由に、無から新しい規則を作り出す能力のことなのだ。しかも天才が発見するルールは、凡人が後追いついてその通りやれば名作ができるというような「マニュアル」ではない。逆に科学的発見はすぐにマニュアル化されるからこそ、科学者に天才はいない。誰にも真似まねで

きない規則を無から創造するのがカント的天才である。

思わず考え込む——はたしてカントはモーツァルトを天才とみなしたのだろうか、それとも……？⁽⁵⁾ これはじつに微妙な問いだ。というのも、一方でモーツァルトはたしかに、カントがいう既成の規則を自在に操る高IQ型天才少年だったから。

何度も述べるように、モーツァルトの少年時代、音楽家はまだ独創的であることを強く求められる職業ではなかった。なぜなら彼は職人なのだから。職人にとって何より大切なのは、客のどんなリクエストに対しても応えられるよう、ありとあらゆるパターンを熟知していることだ。そして父レオポルトが息子に徹底的に教え込んだのも、これであった。パターンを教えたのだ。そして土地によっても好みの音楽パターンが違ったから（たとえばミラノの好みはこれ、ウィーンの好みはこれ、パリで人気なのはこれ、といった具合である）、レオポルトは息子に口やかましく、それぞれの場所でどんなスタイルが好まれているかをじっくり見定めるといのが常だった。

C モーツァルトの音楽には、どんな作品でも必ず出てくる明らかなパターンがいろいろある。たとえば彼のピアノ曲はどれも、ほとんどが十六分音符のオンカイ(ウ)の繰り返しばかりでできているといえなくもないし、伴奏音型にも定型がいくつもあり、主和音に解決する直前の属和音上のトリルも好みのパターンだ。またメヌエットは当時一番需要が多かった舞曲だが、レオポルトが息子に最初に教えたのもこれだった。晩年になるまでモーツァルトは、オペラであろうがピアノ・ソナタであろうが交響曲であろうが、繰り返し巻き返しメヌエットのスタイルを使い続けた。これらはすべて「規則に従って習得されたもの」だった。だが同時にモーツァルトは、何も無いところに規則を作り、しかもその規則は誰にも真似ができないという意味でもまた、文句なしの天才だった。「完全な規則破りであるにもかかわらず、何か別のルールに基づいているとしか思えない調和がある」というような感覚である。つまりそれはパターン化やマニュアル化を徹底的に拒む規則であり、規則にならない規則なのだ。

(岡田暁生『モーツァルト よみがえる天才3』による。)

問1 傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字をふくむ熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
15
17

(配点6点)

(ア) コンガン

15

- ① コンセイ合唱団を結成する。
- ② 荒れ地をカイコンする。
- ③ 生活がコンキウする。
- ④ セイコンをかたむける。
- ⑤ 改革の必要性をコンコンと説く。

(イ) テンイムホウ

16

- ① 容疑者をシャクホウする。
- ② 傷口をホウゴウする。
- ③ ホウジュンな土地で耕作する。
- ④ 岩石がホウラクする。
- ⑤ コクホウの仏像を拝む。

(ウ) オンカイ

17

- ① カイゴ施設に勤務する。
- ② 近所にそば屋がカイテンする。
- ③ 社会カイソウを研究する。
- ④ 児童のユウカイを警戒する。
- ⑤ カイジケンの記事を読む。

問2

空欄

X

解答番号は、

18

・

19

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点6点)

X

18

- ① 飄々ひょうひょうと
- ② 滔々とうとうと
- ③ 淡々と
- ④ 訥々とつとつと
- ⑤ 肅々と

Y

19

- ① プロパガンダ
- ② サンプル
- ③ ミニチュア
- ④ シンボル
- ⑤ オマージュ

問3

空欄

A

C

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A **20**、B **21**、C **22**。

(配点6点)

- ① たしかに
- ② すると
- ③ たとえば
- ④ あるいは
- ⑤ しかも
- ⑥ とりわけ
- ⑦ ちなみに
- ⑧ むしろ

問4

傍線部(1)「この対極にあるのがマスコミの寵児となるようなスター・シェフの類である」とあるが、「スター・シェフ」を取り上げることでのようなことを述べようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、**23**。

(配点5点)

- ① 職人は匿名の存在として創作するが、自らの作品が有名になると芸術家として名のということ。
- ② 一般の料理人は自らを職人だと自認しているが、有名な料理人は芸術家気取りであるということ。
- ③ 職人は作品に自らの名を残さないが、芸術家は他の人間と区別された一個人として創作を行うということ。
- ④ 職人の多くは無名のまま作品を残したが、芸術家は自らの作品によって有名になったということ。
- ⑤ 多くの料理人は型通りの料理を出すが、有名料理人は料理を芸術として提供しているということ。

問5

傍線部②「音楽家の場合、『自立した芸術家』が生まれるのはかなり遅れた」とあるが、「自立した芸術家」としての「音楽家」とはどのようなものか。その具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は、

24。

(配点5点)

- ① 雇用主である貴族に支配されず、誰からの助けも借りずに自分一人で自由気ままに生活することができる音楽家。
- ② 神や教会に奉仕するために音楽を作るのではなく、近代的な自我意識をもって生きる自身のために作る音楽家。
- ③ 無名の職人としてではなく、誰にも真似できない音楽を創作することで自らの名を歴史に残そうとする音楽家。
- ④ 顧客や雇用主を求めることなく、自己の才能を発揮して比類ない作品を提供することで生活が成り立つ音楽家。
- ⑤ 貴族や教会に雇われることを拒否し、自己表現としての作品を創作するため、世間との関わりを断ち切る音楽家。

問6

傍線部③「いちはやく近代的な『天才芸術家』の概念を予告した」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。(配点5点)

- ① 天才とは既成のルールを破ることで自らの独創的な作品を作り出す者だとカントが述べた著作は、個人の無限の可能性を重視する近代に生まれた天才芸術家のイメージに影響したということ。
- ② 天才はなにもにも縛られずに本能的に独自の規則を創造する者だとカントが述べた著作は、その天才の概念を体现する芸術家であるモーツァルトが亡くなる前に出版されたということ。
- ③ 天才とは既成の規則にとられない独創性を無意識に発揮する者だとカントが述べた著作は、個人の自由や無限の可能性を重んじる近代における天才芸術家の姿を見抜いていたということ。
- ④ 天才は一般人には思いもよらない規則を何もないところから創造する者だとカントが述べた著作は、職人であったすべての画家や音楽家が芸術家として評価される近代の到来を予言していたということ。
- ⑤ 天才とは既成のルールに従わずに自由に自己の本能のままに生きる者だとカントが述べた著作は、個人の自由や可能性に信頼を置く近代的な天才芸術家のあり方を先取りしていたということ。

問7

傍線部(4)「カントは、まったく同じ理由によって、科学に天才はいないと断言する」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。(配点5点)

- ① 人が既成の規則や型を習得して評価されても、それらを後追いつた成果であるのと同様に、科学者が新たな規則を発見しても、彼が既成の科学の規則を学習した成果であって独創的ではないから。
- ② 人は既成の規則や型を習得することで新たな規則や型を作るのと同様に、科学者が新たな規則を発見したとしても、誰かがそれを学習し後追いすることでさらに新しい規則が発見されるから。
- ③ 人がいくら既成の規則や型を習得してテストで高得点を得ても、その独創性は測れないのと同様に、科学者が新たな規則を発見しても、その発見の独創性は数値に表れるものではないから。
- ④ 人がいくら努力をして新しい規則を作り出してもそれが既成の規則で評価できないのと同様に、科学者が新たな規則を発見しても、それを既成の規則で評価することができないから。
- ⑤ 人が既成の規則や型を高度に習得しても、それらを後追いつたのにすぎないのと同様に、科学者による新たな規則の発見も、人々が学習し模倣できるものである以上、独創的とはいえないから。

問8

傍線部⑤「これはじつに微妙な問いだ」とあるが、この「問い」に対する筆者の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、27。

(配点6点)

- ① モーツアルトは、他者が模倣できない斬新な規則を作ったという点ではカントの見方にはあてはまらない天才である。
- ② モーツアルトは、他の音楽家の誰よりも強い芸術家意識を有していた点ではカントの見方に合致する天才だと言える。
- ③ モーツアルトは、凡人が絶対に真似できない新たな規則を発見した点ではカントの天才に対する見方に合致しない。
- ④ モーツアルトは、他の音楽家の誰にも真似できない斬新な規則を作った点ではカントの天才に対する見方に合致する。
- ⑤ モーツアルトは、当時好まれた音楽のパターンを熟知して多用した点ではカントの天才に対する見方にあてはまる。

問9

筆者の考えに合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、28。

28。

(配点6点)

- ① ダ・ヴィンチやミケランジェロは、自らは特別な存在だという芸術家意識をもつことで近代芸術をもたらした。
- ② モーツアルトは一人の芸術家として生きていくことを願ったが、周囲は彼を芸術家だとは認識していなかった。
- ③ ベートーヴェンが芸術家として周囲から評価されたのは、彼の音楽が規則から外れたものだったからである。
- ④ レオポルトは息子に優れた職人となる教育を徹底したが、その教育はカント的天才を育てることになった。
- ⑤ カントは、優れた頭脳をもつと同時に、既成のルールに反発して革新的な音楽を作る者を天才と認めた。